網野歴史学への誘い

榎田　二三子

精神の自由なつながり

昨年二月、「民衆の生活をもとにした新たな日本史像を描き出し……」と書かれた歴史学者網野喜彦についての訃報を新聞で目にした。中学受験の年号暗記以来、歴史に対して苦手意識を持つ私は、網野氏について何も知らなかったのだが、「民衆の生活をもとにした」という文言が目に止まったのだろう。自分の心に何か触れたものは、きっとそのうち生きてくると実感している私は、今回も心に留めておくことにした。

そして半年以上経ってから、『**僕の叔父さん網野喜彦**』（中沢新一著、集英社新書）に出会うこととなった。宗教学者の中沢新一は、五歳のと

きに叔母の夫として網野氏と出会った。「叔父―甥」として、人類学でいわれる「冗談関係」を結んできたという。「おじ―甥、おば―姪」という冗談関係の中では、年長者から権威が押し付けられたり、義務や強制が発生しにくいと言われている。そして年齢が離れていても、対等な関係における精神の自由なつながりの中から、重要な価値の伝達がされる。読者の中には、おじ・おばがたくさんいて、比較的年齢の近い叔父・叔母と親密な関係を結んだ経験を持つ方があるだろう。戦後日本の家族人数は減り続け、家族内の人間関係の減少について言及されるが、その陰で、親よりもっと自由な叔父・叔母との関わりをも失ったことは、残念である。

中沢氏と網野氏は、「新ちゃん」「おじちゃん」と呼び合う長年の冗談関係の中で、対等に語り合い、一つの主題を共同で考えるコラボレーションをするまでになる。この本は、そのような二人のやりとりを中心に書かれ、網野歴史学の入門書的存在である。

中沢氏は、網野氏に民衆史のレッスン、歴史の読み方を教えてもらい、網野氏は自由に考えを語り合う中で自分の考え方やその道筋を形作っていった。自分の中で熟成させる作業と共に、異なる立場や視点をもつ他者との精神の自由なつながりにおける語り合いが、思索を触発すると実感させられる。

歴史の読み方から学ぶ

網野氏は、中世の歴史学者である。氏は、これまで光のあてられなかった民衆、その中でも非農業民に焦点をあてて歴史をとらえている。網野氏は、「歴史学とは過去を研究することで、現代人である自分を拘束している見えない権力の働きか

ら自由になるための確実な道を開いていくことである」と信じ、甥が「今の学問の世界に行き渡っているような常識に依存した」発言をすると厳しい口調で「自分の常識を押しつけるのは、ぜったいによくない」「どんな学問でも同じだ」と言った。また、網野氏の歴史学の出発点ともいうべき『蒙古襲来』（小学館文庫）で、平安時代と安土桃山・江戸時代に挟まれた中世の社会を読み解いていこうとする姿勢として、「近世以降の社会、われわれが慣れ親しんできた社会との大きな違いがそこにあるので、ひとまずは「常識」をすてて、この時代に生きた人々の実態」を眺めようとしている。

似たようなことは、保育についてもよく言われる。子どもたちに出会い、理解し、関わろうとするとき、私たちは自分が持っている大人としての常識や価値観をできるだけ取り除き、出会うことを求められる。近年、親への支援の必要性が言われているが、親と関わるときはどうだろうか。私たちは、知らず知らずのうちに、自分が育った社会の影響を受け、社会の中で生活し、そこで自分を形作ってきている。時にはあまりに慣れ親しみ、自分のとらえ方が時代の影響を受けていることにすら気づかないこともある。戦後六十年間は、日本の社会がさまざまな点で急速に変化した時代と言ってよいだろう。十年の年齢差があれば、同じ社会現象を経験しても、そこでの経験の内容は異なる。当たり前と思っている常識や価値

観は、世代によって異なり、多様になっている。大人同士が理解し合おうとするときにも、時代背景を考慮し、自分の持つ常識や価値観を一度取り去ることが求められる。その上で、一人の子どもを見守り育む大人として、子どもたちに伝えるべき価値を協同で見いだす必要があるだろう。

日本人の野性

子育て中の親の話を聞くと、こんな小さい子にそんなに叱っても……と思ったり、叱らなければならない悪いことは何だろうと思うことがある。親が「悪い」と思うものと、子どものもっている自然性や野性というものとのギャップを感じるのである。

中世、「悪源太」、「悪左府」という呼び名に含まれている「悪」には、道徳的評価は含まれず、異常といえる激しさや強さをそのように表現していたという。今でも使われる「わるいやつ」には、道徳的評価は含まれず、「いたずらもの」の意に使われるが、それに近いものであったらしい。網野氏は、日本人の野性が蔓延していた最後の時代として中世をとらえ、『蒙古襲来』を書いた。

そして、悪や日本人の野性を考えるきっかけが、中沢新一の父、中沢厚氏との「飛礫」をめぐる語り合いであった。中世、悪党たちはまず礫を飛ばし、相手をひるませて戦った。戦後では、学生運動が盛んであった頃、学生たちが自衛隊に投石していたのを思い出す。他国にも見られる「飛礫を打つ」という行為に、「人類の根源的な衝動」を感じ、「動物から原始の人間を区別した本質的なもの」であり「根源的な人間的行為であること」を中沢氏は、見ようとしている。

早くは探索行動を始めた頃から、悪いこと、

やってはいけないこととして、その行為を止められ、発露しないようにとしつけられる子どもたちがいる。子どもが子どもとしてある、その自然な姿が大人社会の価値観で強く否定される。網野歴史学は、大人の社会が「悪」ととらえるものには、人の自然性や野性の発露が含まれるということに気づかせてくれる。

（武蔵野大学）

マイ・ディアー二人の〈女の子〉

菅　聡子

子どもの頃、私はスウェーデン人になりたかった。〈アストリッド・リンドグレーンの国の人〉になりたかったのだ。初めてリンドグレーンの作品にふれたのは、小学校低学年の頃だ。クリスマスの朝、目が覚めると枕元に『長くつ下のピッピ』（大塚勇三訳、岩波書店）が置かれていた。